

## 高校生のエイズ・性感染症に対する知識と性意識に関する調査 —過去11年との比較—

深田 實江子

看護学部基礎看護学講座

高校を中心に12年間継続して行ってきた青少年健全育成のための「エイズ・性感染症予防教育」の内容を再検討し充実させるために、本年度6月から12月にかけて高校生1920名を対象にエイズ・性感染症に対する知識と性意識に関するアンケート調査を行った。更に、2006年に行った同調査（対象高校生2908名）の結果と比較検討することによって、11年を経て高校生の知識や性意識がいかに変容したかが一部明らかとなった。①エイズの知識については、5項目すべてにおいて2006年群が9～24%有意に高かった。②性感染症については、逆に2017年群が11%有意を示した。③結婚前の性行為については、容認派が2006年群にやや多く（4%）、慎重派が2017年群にやや多かった（6%）。④結婚願望と家庭の大切さについては、両者とも2017年群が有意を示した。これらの結果から考察されることは、①②に関しては情報提供の内容が変化しつつあること、性感染症がクローズアップされているなどの現実がある。しかし、日本においてはエイズが年々右肩上がりに増加傾向にあること、しかも若者に増えている現実は深刻である。なお正しい情報の提供、教育が必要となる。③については、感染予防の観点からは好ましい結果といえる。④では、少子高齢化と家庭崩壊の現実を打破してほしいと願うが、問題は単純ではなく、社会的支援と共に人格教育の必要性が望まれる。

## 看護学生のセクシュアルマイノリティに対する意識調査

前田 歩<sup>1)</sup>、佐藤 裕見子<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 看護学部地域保健看護学保健師コース、<sup>2)</sup> 看護学部地域保健看護学講座

A 大学看護学部3年生、4年生にアンケートを配布し、看護学生のセクシュアリティに対する意識調査を行った。セクシュアルマイノリティについて見聞きしたことがある人は「ある」が94%で、「ない」が6%であった。また、身近な人がセクシュアルマイノリティだった場合にどう思うかの設問においては賛同する人が多く、同性愛者が近所の人であれば88%、学校のクラスメイトでは89%、きょうだいは58%、自分の子どもは51%であった。身近な人が性別を変えた人であればどう思うかについては、近所の人90%、学校のクラスメイトは90%、きょうだいでは59%で賛同の値が高かった。反対に自分の子どもでは拒否が52%であり賛同を上回った。

看護師とは「優しい人」などというイメージが看護学生の中にもありそれ故に賛同が多くなったと想定される。しかし良心的であるがために「自分の子どもであればどのように接したらいいかわからない」など差別意識が根底にあり、子どもでは拒否の態度が上回ったと考えた。そのた一般の人も知っている知識を看護学生としても十分に学ぶ必要があると考える。またその学びでは当事者の話しを聴く機会を設けたり、グループワークをするなど講師が一方的に教えるだけでない学びも取り入れることで多様な性の知識の蓄積をおこなうことも必要だと考える。